

幼児の社会測定的地位の安定性に関する研究

主として交友関係において

安 達 桂 子

A Study of the Stability of Sociometric Status in Preschool Children

An Analysis of the Stability of their Company

Keiko ADACHI

問 題

社会測定的地位 (sociometric status 以下 **S.S.** と略す)とは、ソシオメトリック・テストにおける選択 (choice)・排斥 (rejection) から求められる各個人の地位であり、その場合の指標として選択数、被選択数、相互選択数、排斥数、被排斥数、相互排斥数などが用いられる。また、本研究でいう安定性とは、ソシオメトリック・テストで得られた **S.S.** が、ごく普通の条件のもとで、どのくらい安定した状態を保つかを表わす概念である。

本研究では、まず第1に、幼児を対象にソシオメトリック・テストを実施する場合の問題点を述べ、その後で、**S.S.** の安定性についての検討を行なう。

幼児を対象にソシオメトリック・テストを実施する場合には、幼児の年齢的条件からくる理解力、判断力、読字・書字力などの未発達に加えて幼児の集団範囲の把握力の未発達などの理由から、質問紙形式でのソシオメトリック・テストは必ずしも適切ではない。そこで、従来、幼児を対象とする場合には、主として、面接法あるいは写真呈示法が用いられている。

例えば、田中熊次郎 (1949)、上田敏見 (1963)などは、個別面接法によっている。また、写真呈示法は、全員呈示法と強制分類法に分けられる。

i) 全員呈示法の例としては、Marshall (1957)の研究があり、ここでは4才児の写真を壁にはりつけてソシオメトリック・テストを実施している。また、田中 (1959)、上田 (1962)らはカルタ形式の呈示法を用いているが、この方法ではグループの大きさ、写真のおかれた位置、順序による偶然からの選択などが結果に影響を及ぼすと考えられる。

ii) 強制分類法としては、加茂富美子 (1963)が三件法で行なっているが、この方法は手続の複雑さ、実施上の困難さなど多くの問題を含んでいる。

神保信一・菅沼和恵ら (1970)は、お互いに熟知していて表現力のある5才児、6才児では口答法によるソシオメトリック・テストが可能ではないかと考え、まずこの方法によって資料を収集し、それから2週間後に、同じ対象に対して写真分類法を行なった。これら2つの方法について、男児では一致度が94.7%、女児では73.6%であり、全体としては83.2%の一致度がみられたと報告している。他に長谷川浩一 (1969)は「ゆうびんテスト」を考案し、写真呈示法と比較してみたところ、集団構造をとらえるまでとはいえないにしても、ほぼ同じような集団の傾向を明らかにしうると述べている。その他、Koch, H. D. (1933)は16人の4才児を対

象に、一対比較形式で友だちの選択をさせ、これと併行して37の行動項目からなるチェック・リストを用いて観察を行なった。そして被選択数の順位と各行動項目について幼児の占める順位との相関を求めたところ、有意な相関が認められたものは僅か8項目についてであった。また、Lippitt, R. (1941) もこれと同様の結果を得ている。McCandless, B. R. ら (1957) は、ピクチャ・ソシオメトリック・テストを用いて、得られた結果を教師の判断との関係で検討したところ、両者の間に有意な関連が認められた。彼らは、ピクチャ・ソシオメトリック・テストは、幼児の交友関係測定テクニックとして、また、幼児の社会的行動の研究の方法として有望なものであると述べている。

以上のように幼児を対象にソシオメトリック・テストを実施するために、これまで様々な方法が工夫されているが、本研究ではピクチャ・ソシオメトリック・テストの方法を用いる。これには、前述のように全員呈示法と強制分類法があるが、強制分類法は時間が非常にかかり、また本研究の対象学級の成員が38名なので各幼児に37人もの対象を評定させることも無理と考える。そこで、全員が写っている写真1枚を被験者に呈示し、個別面接を行った。ただし、写真が少し小さくて見にくいこともあったが、さして支障にはならなかったと考えられる。

次に、本研究の主題である **S. S.** の安定性に関する研究について述べる。

S. S. の指標として他者から受けた選択数合計（被選択数）を用いて安定性を検討したものに、*Hunt, J. McV. & Solomon, R. L. (1942)*, *Bonney, M. E. (1943)*, *Byrd, E. (1951)*, *Witryol, S. L. & Thompson, G. G. (1953)*, *Wertheimer, R. R. (1957)*, 上田 (1964 a) などの研究があり、また与えた選択数合計（選択数）を用いて検討したものに、*Speroff, B. J. (1955)*, *Gronlund, N. E. (1955)*, 小川一夫 (1956), *McCandless, B. R. & Marshall, H. R. (1957)*, *Medinnus, G. R. (1962)*, 上田 (1964 b), などがある。

これらの研究では、様々な観点から **S. S.** の安定性が検討されているが、そこでは、被選択数あるいは選択数のどちらか一方が **S. S.** の指標として用いられており、交友関係の安定性を考える場合、やはり両者を一緒にとらえて検討してみる必要があると考えられる。また、相互選択についての分析がどの研究にもなされていないことも問題である。

そこで本研究では、幼児を対象として、交友関係の安定性の継時的変化をとらえることを目的とし、その際、**S. S.** の指標として選択数、被選択数、相互選択数の3つをとりあげて検討することにした。排斥は、教育的に望ましくないと考えられたので、本研究では行なわなかった。

まず、**S. S.** の指標として選択数、被選択数、相互選択数を用いた場合の安定性の検討を行ない、その後以下4つの仮説を検討することとした。

〔仮説〕

- (1) テスト——再テストの間隔が長くなればなるほど安定性は一般に低下するであろう。
- (2) 同一期間の比較でいえば、テスト回数が増える調査期間の後半ほど、安定性は高くなるであろう。
- (3) **S. S.** の安定的上位群は、下位群よりも相互選択数が多いであろう。
- (4) 相互選択している者同志の方が一方選択している者より安定性が高いであろう。

方 法

本研究の被験者は、汐路幼稚園年中児（4才児）1クラスであり、幼児数は男子18名、女子

20名。実施期日、期間、人数などは Table 1 に示す通りである。なお12月から7月までの間に男子1人が転出、1人転入、女子2人が転出した以外はクラス内の変動はない。また、年中組から年長組への移行時に担任が変わっている。

Table 1 調査期日および被験者数

回数	1	2	3	4	5	6	
M	14	14	16	16	16	13	M…男子
F	16	19	19	15	17	15	F…女子
T	30	33	35	31	33	28	T…全体
実施日	12/13	1/17	3/19	5/20	6/22	7/13	
期間(週)	5		9		9		
	5		5		3		

手続き；ピクチャ・ソシオメトリック・テスト形式で、幼児全員が写されている「七夕さま」の写真（たて12.7cmよこ18cmのカラー版）を使用した。また、個人面接形式のため、1人1人の幼児と会話をするので、十分ラポールがついていないと正確なデータが得られないと考えられたため、調査を行う前にあらかじめ2日ほど幼児と遊び、また調査当日も、朝から行って保育内容を見学し、午後調査を実施した。その後5回とも調査実施当日は少なくとも朝から観察を含め幼児と共にいることにした。選択の規準は、幼児の生活はほとんどが遊びであり、また幼児が理解しやすく、実際場面も観察でき、さらに教師の観察、意見も聞けることなどの理由から「遊び」を用いた。範囲は幼稚園の学級内で、選択数は無制限。質問形式は、「この組の中で遊ぶ時だれが1番好きなの？」「次は？」というようにたずね、幼児に写真を指でさししめしてもらったようにした。

結 果

1. S.S. の各指標による安定性の比較検討

本研究では S.S. の指標として選択数、被選択数、相互選択数の3つを用いた。それらを全体および男・女別に求め、各テスト時点間相互の相関を求めた。相関係数の算出は、Gronlund, N.E. (1955), Hunt, J. McV. & Solomon, R.L. (1942) のようにスピアマンの順位相関係数を求め、他に参考のためケンドールの順位相関係数も算出した。

まず、選択数を用いた場合を Table 2~4 に示した。次に被選択数を用いた場合を Table 5~7 に、相互選択数を用いた場合を Table 8~10 に示した。

これら3つの指標にもとづく安定性を検討してみると、S.S. の指標として被選択数を用いた場合にその安定性が最も高くなるのがわかる。（全体における有意な相関の数の比較をすると、選択数 $\frac{8}{15}$ 、被選択数 $\frac{15}{15}$ 、相互選択数 $\frac{10}{15}$ ）。選択という行動は本人の意志が強く反映するのに対し、被選択は、相手の意志によって決まり、全体との関係によって決定されるものである。S.S. は、クラス全体との関係でとらえられるものであるから、被選択数は、選択数に比べて S.S. の指標としての妥当性が高いと考えられる。また、被選択数を用いると欠席児童にも何らかの地位が与えられるが、選択・相互選択では当該児童の地位が与えられず、データがゆがむ可能性がある。以上のことより S.S. の指標としては、従来通り、被選択数を用いることが妥当であると考えられる。

Table 2 全体における選択数の順位相関

ρ_s	12月	1月	3月	5月	6月	7月	τ	12月	1月	3月	5月	6月	7月
12月		.488	.297	.420	.306	.256	12月		.426	.248	.352	.252	.192
1月	**		.200	.471	.349	-.048	1月	**		.154	.418	.283	-.049
3月				.241	.204	.470	3月	*			.181	.155	.373
5月	*	**			.579	.144	5月	**	**			.474	.124
6月	*	*		**		.498	6月	*	*		**		.360
7月			**		**		7月			**		**	

Table 3 男子における選択数の順位相関

ρ_s	12月	1月	3月	5月	6月	7月	τ	12月	1月	3月	5月	6月	7月
12月		.364	.324	.313	.346	.290	12月		.282	.315	.250	.282	.224
1月			.451	.670	.566	.498	1月			.360	.576	.419	.357
3月				.405	.489	.577	3月				.319	.398	.415
5月		**			.717	.360	5月		**			.563	.288
6月		**	*	**		.513	6月		*	*	**		.372
7月			*		*		7月			*		*	

Table 4 女子における選択数の順位相関

ρ_s	12月	1月	3月	5月	6月	7月	τ	12月	1月	3月	5月	6月	7月
12月		.652	.102	.306	-.014	.252	12月		.551	.077	.267	-.036	.130
1月	**		.332	.571	.473	.288	1月	**		.269	.478	.353	.267
3月				.533	.653	.477	3月				.446	.525	.377
5月		**	*		.505	.049	5月		**	**		.391	.017
6月		*	**	*		.567	6月		*	**	*		.469
7月			*		**		7月			*		**	

ρ_s …スピアマン
 τ …ケンドール
 ** $P < .001$
 * $P < .05$

Table 5 全体における被選択数の順位相関

ρ_s	12月	1月	3月	5月	6月	7月	τ	12月	1月	3月	5月	6月	7月
12月		.532	.563	.590	.579	.592	12月		.427	.452	.486	.460	.480
1月	**		.358	.636	.656	.512	1月	**		.284	.498	.525	.406
3月	**	**		.498	.489	.529	3月	**	**		.384	.383	.421
5月	**	**	**		.658	.563	5月	**	**	**		.535	.439
6月	**	**	**	**		.553	6月	**	**	**	**		.441
7月	**	**	**	**	**		7月	**	**	**	**	**	

Table 6 男子における被選択数の順位相関

ρ_s	12月	1月	3月	5月	6月	7月	τ	12月	1月	3月	5月	6月	7月
12月		.494	.458	.770	.675	.586	12月		.344	.362	.650	.534	.494
1月	*		.231	.508	.621	.264	1月	*		.159	.366	.458	.196
3月	*			.406	.547	.553	3月	*			.285	.423	.438
5月	**	*	*		.802	.636	5月	**	*			.677	.511
6月	**	**	**	**		.645	6月	**	**	**	**		.521
7月	**		**	**	**		7月	**		**	**	**	

Table 7 女子における被選択数の順位相関

ρ_s	12月	1月	3月	5月	6月	7月	τ	12月	1月	3月	5月	6月	7月
12月		.462	.731	.387	.406	.635	12月		.403	.606	.325	.330	.533
1月	*		.505	.576	.582	.849	1月	*		.418	.497	.483	.774
3月	**	**		.634	.471	.520	3月	**	**		.527	.361	.433
5月	*	**	**		.089	.575	5月	*	**	**		.083	.460
6月	*	**	*			.514	6月	*	**	*			.409
7月	**	**	**	**	*		7月	**	**	**	**	**	

Table 8 全体における相互選択数の順位相関

ρ_s	12月	1月	3月	5月	6月	7月
12月		.529	.218	.306	.105	.306
1月	**		.407	.752	.534	.391
3月		**		.532	.570	.542
5月		**	**		.704	.255
6月		**	**	**		.519
7月		*	**		**	

τ	12月	1月	3月	5月	6月	7月
12月		.433	.182	.247	.076	.224
1月	**		.327	.617	.369	.286
3月		**		.430	.441	.409
5月		**	**		.536	.189
6月		**	**	**		.380
7月		*	**		**	

Table 9 男子における相互選択数の順位相関

ρ_s	12月	1月	3月	5月	6月	7月
12月		.474	.676	.707	.541	.533
1月	*		.240	.392	.309	-.190
3月	**			.265	.211	.420
5月	**				.564	.269
6月	*			**		.302
7月	*					

τ	12月	1月	3月	5月	6月	7月
12月		.414	.550	.610	.440	.379
1月	*		.202	.353	.225	-.163
3月	**			.200	.170	.343
5月	**				.474	.229
6月	*			**		.187
7月						

Table 10 女子における相互選択の順位相関

ρ_s	12月	1月	3月	5月	6月	7月
12月		.484	-.210	-.095	-.019	-.075
1月	*		.050	.378	.473	.083
3月				.234	.281	.517
5月					.419	-.046
6月		*				.722
7月			*		**	

τ	12月	1月	3月	5月	6月	7月
12月		.426	-.174	-.091	-.045	-.053
1月	*		.023	.327	.378	.071
3月				.176	.225	.389
5月					.357	.0
6月		*				.567
7月			*		**	

2. 仮説の検討

1) 被選択数で測られた S.S. の安定性

以上のことより本研究では被選択数を S.S. の指標とし、これがある期間にわたってどの程度安定したものであるかを検討する。Table 11は、このことをテスト時点間の期間別順位相関によってみたものである。

Table 11 期間別にみた被選択数による S.S. のスピアマンの順位相関

期間	3	8	17	18	26	28	31
M	.645	.636	.553	.508	.264	.675	.586
F	.514	.575	.520	.576	.849	.406	.635
T	.553	.563	.529	.636	.512	.579	.592

(週)

また、Table 12には、同一期間（5週，9週，14週，23週）におけるテスト時点別の結果を示した。

Table 12 同一期間における時点別のスピアマンの順位相関

★ 5 週間隔				★ 9 週間隔			
回数	1-2		4-5	回数	2-3		3-4
M	.494	<	.805	M	.231	<	.406
F	.462	>	.089	F	.505	<	.634
T	.532	<	.658	T	.358	<	.498

★ 14 週間隔				★ 23 週間隔			
回数	1-3		3-5	回数	1-4		2-5
M	.458	<	.547	M	.770	>	.621
F	.731	>	.471	F	.387	<	.582
T	.563	>	.489	T	.590	<	.656

これら2つの表より、被選択数にもとづく S.S. はテスト期間の長短によらず、かなり安定したものであり、同一期間の比較ではテスト時点の後半において安定性が高くなることが読みとれる。

2) 安定的上位群，下位群の比較

それぞれのテスト時点における被選択数にもとづく各個人の順位を求め、その平均値より、男子上位5名，下位5名，女子上位5名，下位5名を抽出し、それぞれ，CH群，CL群とした。そしてそれぞれの選択・相互選択数の差を検討したのが Table 13である。

これより、選択数は、安定的上位群と下位群との間で有意な差は認められないが（やや多い傾向はみられるが）、相互選択数は、上位群の方が下位群より有意に多くなっており、S.S. の安定的上位群では交友関係の結びつきが強い傾向がうかがわれる。

3) 相互選択・一方選択による安定性の検討

全部で6回ソシオメトリック・テストを実施したうち、相互選択によって結ばれたペアの

Table 13 安定的上位群および下位群における選択数・相互選択数・被選択数平均

	CH群	CL群	()内SD
選択数	6.01 (2.36)	5.11 (2.81)	
相互選択数	3.69 (1.77)	0.89 (0.71)	
被選択数	7.18 (1.71)	2.67 (0.89)	

(選択数 $t=0.738$ $df=18$
相互選択数 $t=4.375^{**}$ $df=18$)

方が一方選択でできたペアよりも比較的安定して、調査期間中何回も出現する確率が高いことを検討したのが Table 14である。表より、両者の分布には有意な差があり、相互選択の分布の方が出現頻度が相対的に高い方に偏っていることがわかる。これより、相互選択によって結ばれているペアの方が、一方選択でできたペアよりも S. S. の安定性が高いと言えぬであらう。

Table 14 6回中に占める選択別出現率

★ 全体

度数	1	2	3	4以上	Total	()内%
相互選択	57 (49.14)	29 (25.01)	15 (12.93)	15 (12.93)	116	**
一方選択	232 (59.79)	101 (26.03)	37 (9.54)	18 (4.64)	388	
Total	289	130	52	33	504	

★ 男子

度数	1	2	3	4以上	Total	
相互選択	28 (43.75)	16 (25.00)	14 (21.87)	6 (9.38)	64	*
一方選択	96 (54.55)	54 (30.68)	16 (9.09)	10 (5.68)	176	
Total	124	70	30	16	240	

★ 女子

度数	1	2	3	4以上	Total	
相互選択	29 (55.77)	13 (25.00)	1 (1.92)	9 (17.31)	52	**
一方選択	136 (64.15)	47 (22.17)	21 (9.91)	8 (3.77)	212	
Total	165	60	22	17	264	

** P<.001

* P<.05

考察および今後の課題

幼児に「遊び」を規準とするピクチュア・ソシオメトリック・テストを3週間～31週間隔で反復実施し、各テストにおける被選択数間の相関によって、S. S. の安定性の検討を試みたと

ころ、.358（9週間隔）～.658（5週間隔）というかなり高い相関値が得られた。規準や方法が必ずしも同一でないので、直接比較はできないが、Medinnus（1962）、上田（1964 a）の結果などと比較して、本研究の結果は幼児においても、S.S. が長期にわたってかなり安定したものであることを示していると解釈される。従来、幼児の交友関係は一貫性がなく変動が大きく、思いつきのまま、その時の状態などで左右されやすいと考えられてきたが、本研究の対象幼児についていえば、被選択数を指標とした S.S. は、一定期間にわたってある程度安定したものであることが明らかにされた。

テスト——再テストの間隔が長くなればなるほど安定性は一般に低下するだろうという仮説(1)は、本研究の結果では必ずしも支持されていない。これは、本研究の被験者が、年中児の12月、つまり4月のクラス編成から8ヶ月も期間がたってから、ピクチャ・ソシオメトリック・テストを行ない、また、年長児になっても、クラスがえなどがなく、一応集団が形成された状態でテストを行なっていることによるものと考えられる。また、同一期間であれば、テスト時点が後半になればなるほど安定性は高くなるであろうという仮説(2)は、5週間隔、9週間隔、14週間隔、23週間隔で、ほぼ支持されている。このことには、テスト回数を重ねるうちに、調査に慣れたことも大きく影響していると思われる。次に仮説(3)に関しては、予想どおり相互選択の数がL群よりもH群において有意に高くなっている。このような結果より、S.S. が高い幼児の交友関係は相互選択により裏づけられたかなり安定性の高いものであると言える。さらに仮説(4)について言えば、相互選択になっているペアは比較的長期間にわたって安定した関係が保たれるのに対して、一方選択している幼児は、期間がたつにしたがってはじめて選択した対象を選ばなくなり、交友関係が不安定であると考えられる。6回の調査中、個人の選択によってできたペアの頻度を相互選択、一方選択で調べたところ、分布に有意な差が認められ、相互選択の方が一方選択よりも、相対的により多数回出現する割合が高いことより、仮説(4)は支持されたとみなしてよいであろう。

次に、本研究の今後の課題について述べる。まず、本研究で得られた結果の中には、関係が一方選択から相互選択に移行しているケースもみられるので、今後はこのようなケースも含めて S.S. の安定性についてより詳細な検討を加える必要がある。また、これまでの研究で報告されてきた S.S. の安定性については、対象が幼児であっても従来の研究結果とほぼ同様な傾向が認められることが判明した。ただし、ある集団内について S.S. の安定性を検討する場合、調査期間の間隔をどの程度の大きさにとるか、また集団成立後どのくらいの時間を経た集団を研究対象とするか、などを吟味し、さらに個人レベルでの S.S. の変動をより反映するような研究の方法を開発することが残された研究課題となる。その他、本研究で扱った集団には、たまたまリーダーがいて、リーダーを中心にして、クラスがまとまっていたが、いわゆるボスとか、リーダーのいないクラスにおいてはどうか、研究される必要がある。

要 約

本研究は、幼児を対象として、交友関係の安定性の継時的変化をとらえることを目的としたものである。「遊び」を規準としたピクチャ・ソシオメトリック・テストを3週間～31週間隔で6回実施し、その際、社会測定的地位の指標として選択数、被選択数、相互選択数の3つをとりあげて各場合についての安定性を検討した結果、被選択数を用いた場合の安定性が他の2つの場合よりも高いという結果が得られた。以下、被選択数を社会測定的地位の指標として用いて、次のような点が明らかになった。

- (1)社会測定的地位はテスト期間の長短によらず、かなり安定したものであり、同一期間の比較ではテスト時点の後半において安定性が高くなった。
- (2)安定的上位群と下位群との間では、選択数には有意な差はなかったが、相互選択数は上位群の方が下位群より有意に多かった。
- (3)相互選択によって結ばれたペアの方が一方選択でできたペアよりも長期にわたって反復出現する頻度が高かった。

〔付記〕

本研究は、昭和51年度名古屋女子大学に提出した卒業論文の一部をまとめたものである。本研究を進めるにあたり、御指導いただいた心理学研究室の諸先生方に深く感謝の意を表します。また、被験者になってくれた汐路幼稚園の園児の皆さんならびに多大な御迷惑をおかけした汐路幼稚園の諸先生方にもあわせて感謝の意を表します。

参 考 文 献

- 1) Bonney, M.E.: The relative stability of social, intellectual, and academic status in grades II to IV, and the interrelationships between these various forms of growth. *J. educ. Psychol.*, 34, 88-102. (1943)
- 2) Byrd, E.: A study of validity and constancy of choices in a sociometric test. *Sociometry.*, 14, 175-181. (1951)
- 3) 神保信一・菅沼和恵: 幼児の交友関係の発達についての研究. *児童心理*, 24, 723-731. (1970)
- 4) Gronlund, N.E.: The relative stability of classroom social status with unweighted and weighted sociometric choices. *J. educ. Psychol.*, 46, 345-354. (1955)
- 5) 長谷川浩一: 「ゆうびんテスト」による集団の理解——幼児の社会的測定法の試み——. *現代幼児教育*, 1, 11-23. (1969)
- 6) Hunt, J. McV. & Solomon, R.L.: The stability and some correlates of group-status in a summer-camp group of young boys. *Amer. J. Psychol.*, 55, 33-45. (1942)
- 7) 加茂富美子: 幼児の集団構造に関する縦断的研究. *東京女子大学論集*, 13, 31-46. (1963)
- 8) Koch, H.D.: Popularity in preschool children. *Child Developm.*, 4, 164-175. (1933)
- 9) Lippitt, R.: Popularity among preschool children. *Child Developm.*, 12, 305-322. (1941)
- 10) Marshall, H.R. & McCandless, B.R.: A study in prediction of social behavior of preschool children. *Child Developm.*, 28, 149-159. (1957)
- 11) McCandless, B.R. & Marshall, H.R.: A picture sociometric technique for preschool children and its relation to teacher judgments of friendship. *Child Developm.*, 28, 139-147. (1957)
- 12) Medinnus, G. R.: An examination of several correlates of sociometric status in a first grade group. *J. genet. Psychol.*, 101, 3-13. (1962)
- 13) 小川一夫: 学級の社会構造に対する教師の態度に関する研究—第1報告—. *教心研*, 3, 228-235. (1956)
- 14) Speroff, B. J.: The stability of sociometric choice among kindergarten children. *Sociometry.*, 18, 129-131. (1955)
- 15) 田中熊次郎: 交友関係の発達の考察——児童期を中心に——. *児童心理*, 3, 555-566. (1949)
- 16) 田中熊次郎: ソシオメトリーの理論と方法. 明治図書出版. (1959)
- 17) 上田敏見: 三年保育児の発達心理学的研究(2) ——ソシオメトリーを中心として——. 奈良学芸大学

付属幼稚園紀要, No.1, 1-15. (1962)

- 18) 上田敏見：ソシオメトリーにおけるテクニックに関する一検討. 奈良学芸大学紀要（人文・社会科学）, 11, 205-216. (1963)
- 19) 上田敏見：児童の社会測定的地位の安定性に関する研究——主として受けた選択の安定性について——奈良学芸大学紀要（人文・社会科学）, 12, 135-153. (1964 a)
- 20) 上田敏見：児童の社会測定的地位の安定性に関する研究——主として与えた選択の安定性について——. 教心研, 12, 20-27. (1964 b)
- 21) Wertheimer, R. R. : Consistency of sociometric status position in male and female high school students. J. educ. Psychol., 48, 385-390. (1957)
- 22) Witryol, S.L. & Thompson, G.G. : An experimental comparison of the stability of social acceptability scores obtained with the partial-rank-order and the paired-comparison scales. J. educ. Psychol., 44, 20-30. (1953)